

町内にはさまざまなコミュニティがあり、独自の活動をしています。そんな皆さんの活動やイベントをご紹介しますコーナーがステイ・スマイル(笑顔のまま)です。

Stay Smile 高原のアーティストを訪ねて

東に八ヶ岳、西に入笠山を仰ぎ見る、さわやかな高原の町、富士見。この地に生まれ、または惹かれて制作する、素敵なアーティストたちを紹介します。

【今月のアーティスト】 名取 裕太 (なとり ゆうた) さん 天然石アクセサリー作家・富士見町在住
 名取裕太さんは、富士見町と境を接する山梨県北杜市白州町大武川の出身。落合保育園、落合小学校、南中学校と、富士見で少年時代を過ごしました。家が天然石や貴石の研磨・販売業を営んでいたことから、自身も天然石でアクセサリーを作る、石の加工制作の道へ進みました。現在は富士見町で、工房・ギャラリー兼ショップの「天然石工房 石の花」を主宰しています。

天然石アクセサリーは、クリスタルやアメジストといった水晶をはじめ、ターコイズ、メノウほか、色とりどりの様々な珍しい石を使ったアクセサリーです。主には、ブレスレットやペンダント、ネックレスで、その美しさもさることながら、パワーストーンとして開運や災難除けを願って身につけている人も多く、カジュアルでポピュラーなアクセサリーです。天然石アクセサリーの製作で大切なのは、まず石の研磨。石の性質を生かし、その美しさを最大限に引き出すよう丁寧に磨き上げます。次に石の組み合わせや、デザイン、付け心地など。目的や着用時のシチュエーション等、ユーザーに思いを馳せながら構成していきます。

名取さんが手がけるアクセサリーは、既成品からオーダーメイドまで幅広く、豊富なバリエーションが特徴です。また、名取さんが素材として選び抜いた石は、クオリティの高さに定評があり、原石そのものや、原石を少しだけ磨き表面を滑らかに仕上げた「タンブル」のファンも多いそうです。作家として、NHK長野放送局「イブニング信州」で紹介されたほか、作品が映画の撮影で使用されました。

名取さんが今、注力しているのは黒曜石のアクセサリー。和田峠で産出した黒曜石を使ってブレスレットを手作りしています。縄文時代から矢尻などに使われてきた黒曜石は、富士見の方にも馴染みの深い石のひとつと言えます。いにしえの人も使った石が、現代の人を飾ります。



▲黒曜石のブレスレット



▲天然石の勾玉ペンダントトップ



▲作品のブレスレットと一緒に
©名取裕太

【Information】 名取さんの作品は、天然石工房 石の花 (☎0266-62-2814 / 住所: 落合9983-30 / Open 9:30-17:30 / close水曜日・日曜日) をご覧ください。ホームページ: <http://www.ishino-hana.com>
 Facebook: <https://www.facebook.com/tennenseki.ishinohana>

文: 前島孝一 (小海町高原美術館館長・清里フォトアートミュージアム職員) 富士見町富士見在住
 facebook <https://ja-jp.facebook.com/koichi.maeshima.1>

Stay Smile あれから4年・・・東日本大震災

日本赤十字社

震災対策が進んでいた日本で、これほど大きな被害が出てしまったことに、世界の人々は衝撃を受けました。そして、災害への備えの重要性を改めて強く認識したのです。世界189の国や地域に広がる赤十字ネットワークを通じて、赤十字に届いた1,000億円もの、かつてない規模の海外救援金が寄せられました。

それらは、日本赤十字社を通じて子どもたちの体育館や保育園になったり、仮設住宅13万世帯に備える冷蔵庫や洗濯機になったり、地域医療を守る診療所になったりして、被災地の復興を支えています。世界の人々にいただいたのはお金だけではありません。温かい思いやりの心が伝わり、みんなの勇気につながりました。

中学生の女の子が、ワシントンDCの地下鉄駅でバイオリンを演奏し、募金を呼びかけました。海外救援金には、そんな一人ひとりの思いが込められています。私たち全員が被災者を心から心配していることを伝えたいと思います。
 (アメリカ赤十字 アジア・中東課長 Mark Preslan)



私たち日本赤十字社は、これほど大きな支援を世界の皆さんからいただいたことを日本の皆さんにお伝えするとともに、みんなで世界の皆さんに「ありがとう」を伝えていきたいと思っています。その活動を通じて、被災地の復興を支え続ける気持ちを一人でも多くの人と分かち合うことができれば、と願っています。

「敵味方の区別なく救う」という戦時救護から始まり、世界189の国・地域にネットワークをもつ赤十字は、「苦しんでいる人を救いたい」という思いを結集し、人間のいのちと健康、尊厳を守る」を理念に、これからも人道課題の解決に取り組んでまいります。

日本から世界の
人々へ、感謝を伝える
サンキューマーク



ありがとう、全世界。
Thank you, world.

Stay Smile 1日1日の練習を大切に

富士見中学校 サッカー部

富士見中学校サッカー部は、1年生8人、2年生12人の計20人です。僕たちのチームには、特別うまい人がいないため1人にボールを集めてうまい人がプレーするわけではなく、みんなでパスをつないでゴールを決める戦い方をしています。そのため練習では、相手に走り負けないための走力と体力、仲間につながる正確なパス、グラウンド全体に響き渡る大きな声が出るように励んでいます。

3年生が引退してから、初めての大会の新人戦では諏訪大会5位で南信大会に出場できましたが、1日目で敗退という残念な結果となってしまいました。僕はこの結果から、僕たちの日々の練習への取り組みの甘さが浮き彫りになったと思いました。練習してきた走力、体力面は諏訪大会2日目になると、相手チームに完全に負けてしまっていたこと、また、後半になると集中が切れてパスがつながらなくなり、声も出なくなってしまいました。これはもっとしっかり練習していればできたことだと思うので、とても後悔しています。

しかし、今回の大会で弱点が明確になったので、中体連までの大きな課題として取り組めれば県大会にいける可能性はあると思うので、1日1日の練習を大切にがんばっていきたいです。また、底上げをしていき、今は試合に出られていない人が出られるように取り組んでいきたいです。

(富士見中学校サッカー部部長 小林良輝)



▲中体連諏訪大会(6月)



▲新人戦壮行会(10月)

Stay Smile 子育てはたくさんの笑顔とたくさんの手で ~子どもの領分を守るために~

NPO法人ふじみ子育てネットワーク ☎62-5505

「支える」ということ

ある育児本の編集者である発達心理学者がその著書の中で、ほかの動物にない人間の特性として「二本足歩行」「道具を使う」などととともに、これまであまり言われてこなかった「相手が喜ぶのを喜ぶ生き物」という定義づけを紹介しています。

自分が見返りを期待したわけではなくやったことで、相手が喜んでくれたら、そのことだけで自分も嬉しくなる、幸せになる、というのが人間だけに備わっている特性だということです。お母さんが作った料理を子どもが「おいしいね」と喜んで食べてくれたら、お母さんは理屈抜きに幸せな気持ちになることを思うと、すぐに納得できます。この特性は、大人に限った事ではなく、1歳の子どもの自分がちょっとした芸をすることで周りの大人が笑顔になるのがとても好きです。また、幼児が親の手伝いをやりたがるのも、小さいなりの力を使って親の役に立ちたい、役に立って喜ばせたい、という気持ちからだそうです。

ここに人が人を「支える」ことの原点を見ることができると思います。一方的に支えるだけでも、ただ支えられるばかりでもなく、相手が喜ぶことをして自分も嬉しくなる、自分がしてもらったことを喜ぶと、してくれた相手を幸せにする、そういう関係が暮らしの基盤となっていれば、人が人を支援することももっと身近に感じられるように思います。

そして、子どもも、ただ未熟な存在として扱われるだけでなく、その年なりの力を精一杯使って相手を喜ばせる体験をたくさんできれば、子どもたちが成長して大人になりまた次の子どもたちに伝えるという循環の中で、いつか事業としての「子育て支援」は不要になり、支え合いが当たり前前の社会になるでしょう。

